

様式 2 - 2 (Form 2-2)

学 位 論 文 要 旨

Dissertation Abstract

学位請求論文題名 Dissertation Title

Perception, Cognition, and Linguistic Manifestations:
Investigations into the Locus of Meaning

(和訳または英訳) Japanese or English Translation

知覚と認知とことばの表出 — 意味の在り処の追究

氏 名 : 濱田英人

紹介教授氏名 : 中村芳久

(注) 学位論文要旨の表紙

Note: This is the cover page of the dissertation abstract.

学位論文要旨

論文題名： Perception, Cognition, and Linguistic Manifestations:
Investigations into the Locus of Meaning
(知覚と認知とことばの表出 — 意味の在り処の追究)

要約

The primary aim of this research is to elucidate the nature of language in terms of human cognition. For this specific purpose, my dissertation is twofold: one is the investigation of the relationship between the ways of the conceptualizer's viewing the world and of linguistic manifestations, and the other is to reveal how conceptual structures of linguistic expressions are based on or originated in perception.

Concerning the first query, I make explicit the mechanisms of the formation of concepts and of the cognition of entities. Specifically, I explore the nature of language diversity in terms of the two modes of cognition (i.e., to fuse with or detach from perception and conception) and argue that the conventionalized view of the world by the conceptualizer in the course of his native language acquisition influences his construal of entities and linguistic manifestations.

Regarding the second query, I argue that the full elucidation of the relationship between human cognition and language needs to posit the role of our visual experience; i.e., numeral aspects of human conceptualization can be interpreted as general conceptual analogs of visual perception. On this basis, I state how cognition originated in or abstracted from perception influences the ways the conceptualizer views entities, and argue that linguistic manifestations and constructions can be regarded as conventionalized patterns which are resorted to by speakers of a given language.

論文要旨

本論文は知覚（作用）と認識（作用）の視点から言語の本質を明らかにしようとしたものである。これは Langacker の認知文法の言語観にも通じるものであり、この理論が言語記述において説得力を有しているのは人間が固有に有している認知能力を活性化して実体を解釈する認知プロセス（概念操作）の視点から言語現象を捉えているからであるが、Langacker はその認知操作を知覚作用を抽象化した相似物であると述べている。より具体的には、我々人間は日常の知覚経験を基本的な認知能力を用いていわば構造化し、その構造化された概念を用いて事象を理解しているわけであり、ここでのいう構造化とは知覚経験が抽象化されイメージ・スキーマ化されるということであり、それが語の意味や事態を理解する場合に重要な働きをするわけである。

第1章では上記の根本に迫り、人間の知覚と認識の関係、また、認識と言語の関係についてそのメカニズムを明らかにした。具体的には認知科学の視点から人間の認識や概念の大部分が知覚経験に基づいて形成されることを述べ、知覚対象が抽象化されて脳内に **mental image** として蓄積され、その蓄積された **mental image** が今度は新たに知覚された対象が何であるのかを認識することを可能にすることを述べた。このことを脳科学の視点から言い換えれば、人間がある実体を知覚すると脳内にその表象が形成され、それがメタ表象化されることでその実体の概念が確立するのであり、ある実体を認識することは、その実体を知覚することで脳内に表象が形成され、それとすでに確立さ

れた実体の概念（メタ表象）とをマッピングすることで得られる脳内現象であるということになる。ここで重要なことはこの脳内現象は知覚に伴って自動的、無意識的になされるということであり、この場合の知覚と認識はほぼ同時的であるということである。

このことに加えて人間の認知メカニズムで重要なことは脳内のミラー・ニューロンの働きによるメタ認知によって自身の行為を客体視することができるということである。つまり、この能力によって人間は自分自身を認知的に観ることが可能であり、これは知覚と認識の融合状態から認識を分離することを意味する。このメタ認知に関する研究によれば、人間が成長の過程でメタ認知を発達させる初期段階では意識的な概念操作であるが、それが慣習化することで自動化され無意識的になり、通常の認知の一部に組み込まれるということである。そこで第1章ではこの知覚と認識が融合した認知の仕方とメタ認知が人間の事態認知の2つの在り様（局面）であり、本来的には人間はそのどちらの認知の仕方も有しているが、そのどちらの認知の仕方が優勢であるかが個別言語を特徴付け、言語話者が母語習得の過程でそのどちらかの認知の仕方が優勢となることでその言語の話者になるという考え方に立ち、このことを日本語、韓国語、英語の言語現象を対照させて論じた。より具体的に言えば、日本語話者や韓国語話者の場合には知覚と認識が融合している事態認知が優勢であるため、認知主体としての話者は「見え」の範囲にはないので言語化されず、また、直接インタラクションしている実体を必ずしも言語化する必要がないのに対して、英語話者の場合には母語では主語が言語化される必要があることから、その母語習得の過程でメタ認知による事態把握が慣習化しており、その結果、事態を論理的に把握する傾向が強いことを主張した。

続く Part I から Part III では認知文法の言語観でもあり、また、多くの認知科学者の主張でもある人間の認知が知覚経験に根ざしているという原理に基づき、知覚経験が概念世界でスキーマ化され、それが言語表現の意味構造に深く関わっていることを論じた。

Part I では知覚的な遠近感覚に根ざした認識的な遠近概念が認知主体の事態認識とその言語化にどのように反映しているかを論じた。第2章では不定詞補部と動名詞補部では「客体化の度合い」「名詞性」「文主語のコントロール性」に関して異なっていることを分裂文による焦点化の可能性、受動文の可能性から論じ、不定詞補部はそれが表す事態が文主語のコントロール・ドメイン内にあるという認識を反映しているのに対して、動名詞補部はそれが表す事態がコントロール・ドメインの外にあるという認識を反映していることを主張した。また、第3章では相動詞 (aspectual verbs) の補部の共起性に関して、不定詞と動名詞をとる場合について考察し、相動詞の補部の選択にも第2章で述べた認知メカニズムが反映していることを述べた。

第4章では認識的な遠近が話者と聞き手の事態把握で異なっている事例として There 構文を取り上げ論じた。具体的には There 構文で表現される事態は、話者と聞き手ではその事態を認識する概念空間が異なっており、この構文によって記述される対象は話者にとっては actual plane 上の特定の实体であるが、聞き手はそれを ‘virtual instance’ として概念化し、話者の意図を理解するところにこの構文の本質があることを論じた。具体的に言えば、聞き手は there を参照点として新しく導入された事態を話し手の ‘viewing frame’ を通して理解するのであり、この場合、聞き手は話し手の意図を理解するために ‘virtual plane’ 上にその事態を概念化し、それを日常の経験から脳内に蓄積された simulation と照合するのである。このことから、このように概念化された事態は抽象的な ‘setting’ である there に概念的に従属しているため、‘summary scanning’ され ‘unitary entity’

として事態解釈されており、このように事態が認識される場合にこの構文が容認可能となることを具体的な言語事実を挙げ論じた。

Part II では認知ドメインは形、大きさ、色、重さなど物理的世界における我々の知覚経験に根ざしており、それが実体を捉える視点として確立（定着）することで概念領域にも拡張され、様々な概念が認知ドメインとして解釈の視点となることを具体的な事例を挙げて述べた。第5章では Have の多義性を取り上げ、その意味に関与しているドメイン・マトリックス内のどのドメインが前景化されるかで意味の違いを自然に説明できることを述べた。具体的には「所有」という概念を構成している認知ドメインである ‘action’ ‘controllability’ ‘location’ ‘relation’ ‘existence’ の内、have の意味に関与しているのは ‘controllability’ ‘location’ ‘relation’ ‘existence’ であり、その中のいずれかが前景化することで have の意味が決定されることを具体的な例を挙げ論じた。そしてここで重要なことは文主語の事態全体に対する ‘controllability’ であり、この概念が前景化、あるいは背景化することで文主語の意味役割が異なり、その結果、その文が「所有」と解釈されたり、あるいは「存在」と解釈されることを明らかにした。また、この ‘controllability’ という概念は S + have + NP + V 構文の意味解釈にも関わっており、その前景化・背景化により文主語が動作主あるいは経験者と認識されることで「使役文」あるいは「受益文」と解釈されることを述べた。

第6章では二重目的語構文とそれに対応する S+V+ to/for 構文について考察し、ある事態が両方の構文で言語化が可能であるのはその概念化に ‘domain of interpersonal relationship’ と ‘domain of source-path-goal image schema’ という2つの認知ドメインがドメイン・マトリックス内に含まれており、前者が中心的なドメインとして前景化している認識の場合には二重目的語構文で言語化され、後者が中心的なドメインとして前景化している認識の場合には S+V+ to/for 構文として言語化されることを論じた。そしてこの分析の利点として、事態把握において the domain of source-path-goal image schema が関与していることは、一見、Langacker (1986) の二重目的語構文と前置詞文の分析に類似しているように思えるが、本章ではこの認知ドメインの source と goal によって形成される path は文主語から目的語へと固定されているのではなく、それぞれが事態の参加者のどれに対応するかはその事態に因るのであり、このことから ‘The cops fined me \$500 for being drunk.’ のように \$500 が me から the cops に移動するような事態把握の場合も自然に説明できることを示した。また、二重目的語構文が for 前置詞文として言語化されるような事態の場合には、その事態は本来的には文主語とモノの二項の関係概念を表すものであり、そこにもう一人参加者が付加されることで上記の2つの認知ドメインが概念構造に組み込まれるということであり、to 前置詞文に対応する二重目的語構文とは合成構造が異なっていることを述べた。

Part III では概念的自律性と概念的依存性から名詞の概念化について論じた。名詞は一般にその概念化に何か他の実体の存在を前提としないことから概念的に自律的な存在であると言える。しかし、我々はたとえば物理的空間に2つのモノを知覚すると、それを関係付けて捉えようとすることは日常の経験の中でよくあることである。このように捉えられた実体はその概念化に互いの存在が必要であるという意味で relational noun であり、概念的に依存的ということになる。Part III ではこの知覚経験が概念世界での実体の認識にも反映されていることを述べた。

第7章では英語の所有構造である NP’s N と the N of NP という2つの表現形式では、その構成要素である名詞が概念的自律性・依存性の点で異なっていることを主張し

た。具体的には NP's N では、Langacker (1993) の主張にもあるように、それぞれの名詞は参照点・ターゲットとして認識されており、両者は共に概念的に自律的であるということになるが、the N of NP では of は2つの実体が intrinsic な関係であり、NP は N を特徴付ける働きをしていることから、主要部の N は relational noun であり、概念的に依存的であることを論じた。また、NP's N に関して Taylor (1989)や早瀬 (1993) の分析を踏まえ、その容認可能性について考察し、NP's が N を同定するためには両者の間に関連性が認識される必要があることから、このことを認知文法の枠組みで捉え直し、前者が後者の直接スコープとなっている場合に容認可能となることを主張した。それに対して the N of NP では、NP が N を特徴付ける機能を果たしていることから、NP's N とは異なり目立ち度 (prominence) の移行はなく、むしろ N と NP のそれぞれの目立ち度が保持されており、この違いが *the house's front / the front of the house 等の容認度の違いに反映されていることを述べた。

第8章では名詞修飾要素には type 修飾要素と instance 修飾要素の2種類があることを述べ、それぞれの認知メカニズムを明らかにすることで、前者の場合には不連続構成素を形成し名詞句の外置が可能であるのに対して、後者ではそうではないことを原理的に明らかにした。具体的には type に付加される修飾要素はそれによって指示される実体の内的属性の一部であり specificity のレベルに関与するものであることから両者は intrinsic な関係にあり、type を表す名詞は修飾要素に対して relational であり、概念的に依存的であると言える。それに対して、instance に付加される修飾要素は談話空間の中で聞き手が指示物を同定するための参照点として機能しており、従って、ターゲットである instance それ自体は概念的に自律的である。このことを踏まえ、不連続構成素の可能性を名詞と修飾要素を認知的目立ち度(prominence)の観点から考察し、type 名詞とその修飾要素の場合には、前者は主要部として目立ち度が高く、また、その修飾要素も内的属性であるために同様に目立って認識されているのに対して、instance 名詞とその修飾要素の場合には参照点・ターゲットの関係にあるために、その指示物が同定されてしまえば、修飾要素の目立ち度は背景化し、この違いが不連続構成素の容認可能性に深く関与していることを述べた。

第9章では非典型的な目的語を扱い、have a rest 等の軽動詞構文の目的語名詞、take care of 等のイディオム内部の目的語名詞、sleep a sound sleep 等の同族目的語では動詞と目的語の関係がスキーマとその具現形の関係にあり、動詞概念が semi-active に概念化されているために概念的に依存的であるが、そうした目的語の表す概念が客体化されることで概念的自律性が高まることを受動化の容認度に関係付けて論じた。具体的には 軽動詞構文では目的語名詞は特定の行為を名詞概念化したものであり、動詞はその行為を「する」という schematic な意味を表していることから、動詞と目的語名詞は行為のスキーマとその具現形の関係にあり、両者が統合された合成構造で1つの行為を表していると言える。従って、このような概念化の場合にはその目的語名詞を切り離し、それを主語にして受動文で表現することはできない。しかし、そのような名詞概念が客体化され独立した概念として解釈されることで、概念的に自律的な実体として認識され、それを主語とした受動文が可能となることを主張した。そしてこの議論を踏まえ、make fun of, take care of 等のイディオム内部の目的語名詞(fun, care 等)の受動化の可能性もこれと同じ原理に因ることを述べた。また、同族目的語も行為を名詞概念化したものであり、この意味で 'dance a sexy dance'は 'dance sexily' と同義である。しかし、'dance a merry dance' と 'dance merrily' は同義ではない。本章では前者では概念主体は 'dance' という行為を

主観的に解釈し、それを‘sexy dance’と名詞概念化しているのに対して、後者は概念主体が‘dance’という行為を他の‘dance’と比較し、それを‘merry dance’と述べているのであり、それぞれで概念化の仕方が異なっていることを述べ、後者の場合には概念的自律性が高く、それが受動文の容認可能性に反映していることを述べた。

学位論文（乙）審査報告書

平成27年2月4日

1 論文提出者

金沢大学大学院人間社会環境研究科

専攻

氏名 濱田 英人

2 学位論文題目（外国語の場合は、和訳を付記すること。）

Perception, Cognition, and Linguistic Manifestations:

Investigations into the Locus of Meaning

（知覚と認知とことばの表出—意味の在り処の追究）

3 審査結果

判定（いずれかに○印） ○合格

授与学位（いずれかに○印） 博士（○文学）

4 学位論文審査委員

委員長 中村 芳久

委員 堀田 優子

委員 竹内 義晴

委員 入江 浩司

委員 西嶋 義憲

委員 早瀬 尚子

（学位論文審査委員全員の審査により判定した。）

5 論文審査の結果の要旨

本論文は、ロナルド・ラネカー (Ronald W. Langacker) の提唱する認知文法理論について、①その認知的側面には、最新の認知科学の知見に基づき検証を加え、②その言語分析の側面には、7種の構文現象を取り上げ認知と言語のかかわりについて新たな分析を提示することにより、一定の成果を収めたものである。とりわけ認知文法が前提としている認知モデルについて、脳科学も含めた認知科学の観点を援用し、知覚と概念化の融合を指摘し、メタ認知導入の必要性を示したことは、認知モデルの再考を促すものである。それに続く言語現象の分析は、認知文法理論の基づく認知的分析を確実に進展させ、新たな認知モデルが底流にあることを示唆するものである。これらの成果から、十分学位論文としての水準に達していると、審査員全員が判断した。

以下論旨にそって評価される点を具体的に示す。

認知文法理論では、認知主体と認知客体とが対峙し、前者が後者を捉える際の捉え方 (construal) が言語を動機づけ・決定づけるという観点をとるが、本論文は、この認識の在り方に認知科学の知見を基に深く踏み込み、一定の提案をし、そこからさらに日本語・韓国語 vs. 英語の対照に基づき、メタ認知の関与を論証する。この点は、認知文法理論の認知観を精緻化し、その言語分析の射程を広げる上で貢献度は大きく、高く評価される。

第1章に続く Part I から Part III の8つの章では、認知文法理論の研究プログラムにしたがって、7種の言語現象を認知的に分析し、上記第1章の中心論点を実証し、新たな認知モデルの構想も提示する。個々の言語現象の認知的分析自体が、高く評価される。Part I は、知覚的な遠近感が事態把握とその言語化にどのように反映するかを論じる。その第2章、第3章は、不定詞補部・動名詞補部と相動詞補部について、「客体化の度合」「文主語のコントロール性」という認知メカニズムによる解明であり、とりわけ「文主語のコントロール」の内か外かという観点により、これらの言語現象に対して、統一的な説明を与える。この点は英語教育における有用性も注目される。第4章では、いわゆる *there* 構文が、実際の知覚 (actual plane) というよりは、仮想空間 (virtual plane) に対する知覚と相関することを説得的に論じている。

Part II は、言語要素の意味を決定づける認知ドメインが、認知主体と対象との直接的インタラクションに基づいており、それが言語表現を動機づけていく際の認知メカニズムの解明に当てられる。第5章の *have* の多義性の議論では、認知主体の対象に対する支配力の間接化・希薄化から「存在」を意味する *have* や、文法的要素としての *have* の用法が創発するという議論

は注目に値する。第6章の二重目的語構文の議論でも、着眼点がよく、ドメイン・マトリックスのうち、インター・パーソナルなドメインの前景化がさまざまな二重目的語構文を動機づけ、さらにメタ的な捉え方が、物主語の二重目的語構文を動機づけること、が示唆されている。

Part IIIは、認知文法の研究プログラムでも極めて重要な概念的自律性・依存性に基づく、言語化における認知メカニズムの解明である。第7章は、NP' s Nと the N of NPを動機づける認知メカニズムの究明であるが、前者の場合NPがNの参照点であるだけでなく、直接スコープであり、後者の場合、NPは、目立ち度を保持したまま特徴づけ機能を有する名詞句である、という議論を展開する。この議論は、直接スコープと「目立ち度を保持した特徴づけ機能」について詰めの議論を要するが、認知的分析の核心に迫るものである。第8章は、二つのタイプの名詞修飾要素が、概念の自律と依存に関係し、そこに両者の言語的振る舞いの違いを生起させる認知的原理が存在すると論じる。第9章の、特に同族目的語構文の分析は、関係概念を自律概念として捉える認知メカニズムを明らかにしており、関係概念から自律概念への捉え方の展開が、メタ的外部視点に関連することが示唆される。

以上のように、Part IからPart IIIへと認知的分析を深めていきながら、とりわけ、メタ認知を組み込む認知モデルの必要性を説くことになっており、認知文法理論の枠組みからの研究でありながら同時に、理論自体の新たな展開をも示唆する点に、本論文の優秀性を認めることができる。

著者は、平成13年から一年間カリフォルニア大学サンディエゴ校のラネカー教授のもとで認知文法理論の研究を行なっているが、その成果の一部である著書 *Grammar and Cognition* (共同文化社, 2002) に続き、本論文は、あらたな展開を見せる、意義深い大きな成果であるといえることができる。